

レバノン杉

朝日新聞の日曜版に連載されている宮尾登美子さんの『クレオパトラ』が、地中海のギリシャ沖を舞台にしたアクティウスの海戦で最後のクライマックスを迎えた。時は紀元前31年、ローマ軍のオクタヴィアヌスに対峙するアントニオスとクレオパトラ軍は、レバノン杉を内側に外側を厚い鉄板を張った大型のガリ船型戦艦を主力に五〇〇隻を揃えて磐石な構えで闘いに挑んだ。だが嫉妬に狂った勝利の女神は絶世の美女の誉れたかきクレオパトラには微笑まなかった。

この闘いに登場するエジプトの船は、レバノンの木材とギリシャの船大工で建造されてきた。地中海沿岸の現在の姿から想像できないだろうが、当時レバノンでは船材となる巨木が供給できるだけの森に覆われていた。この時代を遡ること4世紀、「かつてバルカン半島にも大建築物の屋根を覆うことができる原生林があった。その巨木で造った建造物の梁がいまなお残っているというのに、豊かな森は失われ、肥沃な野は土石の荒野と化してしまった」ギリシャの哲人プラトンは農耕活動とオリブ栽培でカシの原生林が豊かな森が次々と消えていく姿をこう嘆いた。

気候の乾燥化と森の破壊でその後レバ

ノン杉の原生林の姿は消え、パレスチナ問題や内戦の時にしばしば登場したレバノン・ベーカー高原には背の低い灌木で覆われた赤茶けた姿しか写っていないかった。狭い範囲だがこの地方でレバノン杉の復活をかけた植林が試みられているという記事を見たが、肥沃な表土とともに消えた原生林の復活は並大抵なことではないと結ばれていた。

レバノン杉を伐採したエジプト王朝はナイル川の水位の上昇とともに繁栄と文明を築き、水位の低下とともに衰退するという自然に支配され、クレオパトラの死後ついに最終の水位低下とともに衰退しローマの直轄領とされてしまった。好適な環境に支配されて文明が生まれ、農耕の繁栄とともに森林が消滅していった。数千年の年を越えた現在でも熱帯雨林の急速な減少が続いているが、森林の消滅が文明の衰退へと繋がる方程式はいまも生きているのではなからうか。

(村松 照男)